

「虫には虫を」で一石二鳥

探訪!

!!! @けんきゅうしつ

野菜の害虫を防除するために「天敵」の昆虫を使う手法を、農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構、つくば市）が中心となって開発している。農薬の使用を減らし、農家の健康にもいいと好評で、天敵昆虫を生産する会社も業績を伸ばしている。虫たちが元気になるこの季節に大活躍中だ。

栃木県壬生町のトマト農家、中嶋大輔さん（28）のビニールハウスでは、約1万2千株のトマトにまじって数十株のクレオメやバーベナなどの園芸植物がピンクや紫色の花を咲かせる。「彼らが天敵を養ってくれます」と中嶋さんは笑う。トマト農家の大きな悩みが害虫の「コナジラミ」だ。粉を吸い、「黄化葉巻病」のウイルスを媒介して枯らす。収穫ピークの4〜6月に大量発生しやすく、農家は殺虫剤散布に追われてきた。そこで中嶋さんが昨夏、試験導入したのがコナジラミの天敵「タバコカスミカメ」。西日本に多い体長数センチのカメムシだが、カメムシ特有の臭いがなく、緑色の体に透明な羽を持つ。雑食で、コナジラミのは

農業・食品産業技術総合研究機構（つくば市）

天敵で農作物の害虫防除



トマト農家中嶋大輔さん（手前）と農研機構の日本典秀さん。花をつけたクレオメでタバコカスミカメを増やす＝栃木県壬生町

かにクレオメなどの草の汁も好物。そこでハウスにこらした草を植え、昨夏3千匹を導入したところ、今は約5万匹に増えた。「おかげで今年はコナジラミの大量発生がなく、年15回まいていた薬剤が4回ですみました」。コナジラミは農薬に抵抗力を付けやすいが、天敵ならその心配もない。タバコカスミカメによる害虫防除法の開発を主導したのが、農研機構の日本典秀さん（49）。国の「戦略的イノベーション創造プログラム」の一つで、2年前から数戸の農家に試験導入してもらった。生物農薬として国に登録できれば、幼虫や成虫を販売できる。アブラムシを寄生バチで

農薬使用減、農家の健康にも効果

退治したり、ダニを食べるダニを増やしたり、農研機構は様々な天敵を開発してきた。しかし、被害が見つかってから入れても天敵が育つまでは効果がなく、発生前から入れるとエサの害虫が少なくて天敵が餓死してしまう。

「その点、タバコカスミカメは草も食べるので、コナジラミの被害が出る前から待ち伏せさせられる。理想の天敵です」と日本さん。ただ寒さに弱く、越冬できるかが課題という。

「害虫だからって、根絶やしにしてはいけないんですね」。ハウスで聞いた中嶋さんの言葉が印象的だった。コナジラミを食い尽くすと天敵側も生きていけないので、ゼロにはならない。若干の被害は残るが、多少なら出荷に問題ない。「害虫が全くいない環境を目指す農業は限界にきている」と、農研機構虫・鳥獣害研究領域の後藤千枝領域長は話す。「バランスを保つことが大切なのです」

（三嶋伸一）

新商品続々 エサに工夫



商品の飛ばないテントウムシを手にする手塚 研究開発部長＝稲敷市のアグリ総研

稲敷市の「アグリ総研」は天敵昆虫の生産・開発会社だ。現在、10種類以上の昆虫を育てる。その一つが「飛ばないテントウムシ」。羽を広げても飛ばないナミ

世古智一さん（41）。野外で捕まえた中に飛ばるのが苦手な個体がいるのに気づき、その系統を増やすことに成功。同社が増殖技術を確認し、4年前から販売を始めた。幼虫1匹が数十円という。

害虫がエサだと増やすのが大変で採算がとれない。安い人工飼料を開発しているが、作り方は企業秘密。業績は好調で今夏、市内に第2工場を稼働させる。天敵の多くは、図鑑に詳しく載っていない無名の虫たちだ。「だからこそ、飼いが分かる」と面白くて」と手塚さん。タバコカスミカメもすでに繁殖を進めていて、国の登録が得られ次第、販売するところ。

アナザー・ストーリー Another Story